

坪内良博著『東南アジア人口民族誌』

勁草書房，1986年2月，viii+197+xvページ

本書は、人口学、社会学および民族学（文化人類学）に造詣の深い京都大学東南アジア研究センターの坪内良博教授が1979年～84年に発表した論考のうち東南アジア地域の人口に関する論文を一書に纏めたものである。その構成を紹介すると、第Ⅰ章小人口世界の構造、第Ⅱ章人口増加のしくみ、第Ⅲ章出生と死亡、第Ⅳ章開拓と定住、第Ⅴ章都市と移民、第Ⅵ章疎人口分布と小国家、第Ⅶ章連続と非連続の7章からなっている。

本書に収録されている論文は、いずれの論考も小地域社会の人口現象を人口学、社会学および民族学的手法ないし理論を縦横に駆使して記述・分析したものであり、わが国人口学界においては、きわめて稀な著作であると同時に、人口研究の方法に新たな地平を拓く重要な書物であるといつてよかろう。にもかかわらず、評者は、本書に対して、果して正当な評価が与えられるかどうか危惧するものの一人である。

というのは、人口学においては、人口民族誌ないし民族人口誌の作成、あるいはかかる研究方法について、ほとんど理解が得られないと考えているからである。

そこで、ここでは、人口学における人口民族誌ないし民族人口誌の位置づけに関して若干の検討を加えるとともに、本書刊行の意義についても言及してみたい。

かかる問題を検討する手がかりを民族学に求めてみよう。「近来では民族誌と民族学の関係を同じ民族文化の研究の中で、特殊的記述と一般的説明を為す相違があるのだとする学者が多くなっているが、グラフィーとロギーの語義上からもそれが妥当であるとしなければならない。然し勿論一般的説明と言っても単に演繹の説明を為すのではないのであって、民族誌を基礎にしつつ比較研究によって一般的なものを求めて行くのである。民族誌こそは民族学の資料である。かくて、まず民族誌があって民族学が生まれるのであるが、一方では民族学理論が発達することによって民族調査の方法が更新され、民族誌の記述がより完全なものとなる」（棚瀬襲爾、『文化人類学』〔アテネ新書〕、弘文堂、1950年、pp.11～12）。かかる記述をみると、民族学理論の形成と民族誌とは、密接な関連を有していることになる。とすれば、人口学理論の形式基盤となる人口民族誌ないし民族人口誌と人口学との関連が問題となってくる。

そこで、人口学と人口誌（人口民族誌、民族人口誌）に関して、かかる視点に立った論考が、かつて存在したかどうかをみてみよう。評者の知るかぎりでは、米林富男教授の「社会学における人口誌的研究法に就いて」（日本社会学会編、『社会学』、第3輯、岩波書店、1935年12月、pp.101～117）が、わが国において、この問題を真正面からとりあげた数少ない論文の一つであり、かかる問題については、館稔氏も気づいてはいたようである（館稔、『形式人口学』、古今書院、1960年、pp.11～13）。にもかかわらず、かかる研究方法は、ごく一部の人口研究者にとり入れられたにすぎないといつてよかろう（その例として、皆川勇一教授の「東北における一山村の人口誌的考察」、『人口問題研究所年報』、第3号、1958年8月、pp.40～44を挙げることができる）。

ともあれ、本書は、米林教授の論考以来、約半世紀が経過した記念すべき年に刊行されたという歴史的な重みを感じざるをえないのである。かかる歴史的経過もふまえて、人口研究者が、人口理論と人口誌に関する理解を深めるとともに、かかる研究方法に基づいた稔りある人口理論が形成されることを評者は願っている。本書刊行の意義もそこにあるといえよう。

（清水浩昭）